ヒロシマの記憶と痕跡のかたち

出原　均

第二十回大会では、「距離」をテーマとする展覧会の開催が決定したことにより、シンポジウムのひとつをそれに呼応した内容で組み立てることになった。前年が被爆六十周年にあたり、被爆がそれなりに過去に退いてきた現在、それに関わる美術がどのような現状にあり、どのような課題を持つのかといった点に光を当てようとする試みである。そのコーディネーター役が、一昨年まで広島市現代美術館に勤めていた筆者に与えられた。なお、補佐役である広島市立大学の関村誠氏の多大な協力を得たことも付記しておきたい。

会報九十号でのレジュメに記したように、六十年の歳月は、ひとつの時代が終わったことを感じさせるのに十分な時間である。実際、現在の広島は被爆遺物の撤去や被爆者の高齢化といった問題を抱えている。このような、時間的「距離」への対処は、美術においても切実な課題であることは確かだ。ただ、「距離」を被爆体験の風化といった否定的なものとしてのみ捉えるべきではないかもしれない。その点は、たとえば、被爆者の絵と美術品との比較から浮き上がらせることができるのではないか。しばしば前者は後者以上に強い喚起力があるとされる。それは当然であって、われわれは美術品のように被爆者の絵を鑑賞するのではなく、被爆者の絵をとおして惨劇自体を垣間見ようとするからである。事実が芸術品よりも強度があるのは当然といえば当然である。「被爆者の絵」という枠組みは、「距離」を無効にする強制力がある（実際には、被爆者にも時間的「距離」があるが、この枠組みはそれを括弧に入れる）。他方、美術品には「距離」があらかじめ含まれる。作者はそれを意識せざるをえないし、場合によってはその「距離」を作品化しうるのである。作家主体における「距離」の捉え方によっては多様な表現が生まれうるだろう。たとえば、若手の中には、アニメなどのサブカルチャーに登場する核を題材にした作家がいる。このような作品を無条件で認めるべきでないが、核を受容してきた日常にスポットをあてた新

しい試みとして、少なくとも一定の評価を与えるべきではないか。

このように「距離」を両義的なものとし、そのうえで、「距離」を意識した活動、とくに「記憶」と「痕跡」というかたちで表現されたものをいくつかのジャンルないし表現形式において検証することをこのシンポジウムの課題とした。ジャンルや形式によって、たとえば、記録性の高い表現媒体とそうでないものでは、「距離」の捉え方で異なると思われる。そうした差異を確認し、他方でそれらを貫徹している共通項を探ることが、このテーマの作品を考えるうえで重要ではないか。こうして、絵画、フロッタージュ、映像（遺物の利用）、建築物や記念碑といった領域を選び出した。ただ、建築物や記念碑については作品の場合も、その対象になる場合もあり、やや特殊である。なお、ここに写真ジャンルを加えたかったが、候補者であった写真家の井手三千男氏が交渉中に卒去され、あきらめざるをえなかった。

発表者と発表内容は、以下の通り（発表順）。より詳しい内容については、会報九十号に掲載された大山智徳氏の報告に譲る。

関村誠氏：広島市立大学における「光の肖像」プロジェクトについての報告。このプロジェクトは、学生や卒業生が被爆者の肖像画を制作するもので、関村氏は、被爆者と制作者との交流、両者のあいだを埋める想像力の意義について述べられた。

アーティストの岡部昌生：氏は、場所そのものを擦り出す巨大なフロッタージュをその表現手段としてきた。再開発で消え行く段原地区の路上のフロッタージュに始まり、旧宇品駅のプラットフォームが撤去されるまで毎夏に繰り返された、そのフロッタージュ連作（一九九六―二〇〇四年）まで、二十年に及ぶヒロシマとの関わりについて報告された。

同志社大学助教授・越前俊哉氏：氏は広島市現代美術館の学芸員時代にヒロシマ賞を受賞したクシシュトフ・ヴォディチコの展覧会及びイベントのヒロシマ・パブリック・プロジェクションを担当された。発表は記念碑等に映像を投影するヴォディチコのパブリック・プロジェクションを再考するもので、ヴォディチコがプロジェクションを試みる上でアロイス・リーグルの「近代の記念碑崇拝－その性格と起源」の4つの価値を参照しながらも、「移行対象」としての価値を考えていたのではないかと指摘された。

広島国際大学教授・石丸紀興氏：氏自身が関わってきた被爆建造物の保存活動についての報告。

当日は、時間的制約、そしてなによりも筆者の力不足で、ほとんど個々の発表で終わり、それらを同じ土俵に持ち込むまでにはいたらなかった。青木孝夫氏による関村氏、岡部氏への挑発的な質問が、これを補うかたちとなった。その点で青木氏には謝意を表したい。

先の「距離」を考える場合、関村・岡部両氏の発表は、確かに興味深いものであった。「光の肖像」では、対象が被爆者であること

はあらかじめ与えられたものであり、作品の質に昇華させ難い。端的にいって、被爆者であることは文字情報に負う。しかし、関村氏は、制作における被爆者とのコミュニケーションによる共感、そのような制作のプロセスを強調された。それは、絵画の外部であり、作品自体に焦点を当てるならば、取りこぼされる要素かもしれないが、美術というより広い場を設定するならば、「距離」を埋めるひとつの試みとして考慮に値するだろう(ヴォディチコのプロジェクトは、逆にこうした点を顕在化したものといえる)。一方、岡部氏のフロッタージュにしても、その繰り返しは、あの時代と身体的に触れ合おうとしつつも、つねに距離が生じてしまうがゆえのこととみなすことはできないか。距離の埋め合わせとしての繰り返し。ここには、「距離」が作品の創造に組み込まれており、彼の表現を評価するうえでの判断材料になると思われる。

以上のように、時間的「距離」は、永遠に解消されることのない課題であり、また、作品を生み出すひとつの契機としても、また、その結果、作品の質に関わるものとしても捉えうるのであり、シンポジウムの発表がいくらかでもこの点を明らかにすることができたことを願うばかりである。発表者の方々には深く感謝いたします。

(でばら・ひとし　兵庫県立美術館学芸員)